2020年01月17日 中日新聞 朝刊 29頁

ベトナムの子に言語聴覚士を

口唇口蓋裂のケア充実へ

生まれつき上唇や上あごに亀裂がある口唇口蓋裂の子どもを支援しているNPO法人「日本口唇口蓋裂協会」（名古屋市千種区）は、ベトナムでは初となる言語聴覚士の養成課程をハノイ医科大大学院に新設する内容の覚書を、同大と交わした。この病気が原因で生じやすい言語障害へのケアを充実させる狙い。大学側は四年後をめどに開設を目指しており、協会側が協力して日本の医療技術の移転を図る。

（斎藤雄介）

ベトナムでは口唇口蓋裂は治療できないとの誤解から、出生前診断で判明した場合、中絶につながるケースもあるという。協会では一九九二年の発足以来、現地での無償手術などで同国の医師に治療技術を伝承してきたが、手術後に必要となる言語機能の訓練などについては、言葉の壁があって困難だった。

協会によると、同国には言語聴覚士という概念自体が、そもそも普及していなかった。まずは医学系で国内最高レベルとされるハノイ医科大大学院に常設の専門課程を設け、ベトナム語でのケアができる人材を育成する必要があると、両者の考えが一致した。

ハノイ医科大 名古屋の協会支援で育成

言語聴覚士 発達の遅れや発音の障害、脳卒中後の失語症など言葉によるコミュニケーションに困難を抱える人たちのサポートをする専門職。医療機関や福祉施設などで、障害の原因を探る検査や訓練、助言などをしている。欧米に続き、高齢化により必要性が高まった日本では1997年制定の言語聴覚士法で国家資格を新設。2018年3月時点で3万1000人余りが資格を得ている。

覚書は、専門家の派遣や設備の提供など、養成課程の新設に必要な支援を、協会側がする内容。昨年十二月末、協会常務理事を務める夏目長門・愛知学院大教授らがベトナムを訪れ、ハノイ医科大側と書面を交わした。夏目教授は「現地の人たちに、より質の高い生活を送ってもらえるような治療環境が広がれば」と期待を込める。

覚書の締結に先立ち、養成課程での指導者を育てるための人材受け入れが、既に始まっている。昨年四月から、愛知学院大歯学部の客員研究員として学ぶハノイ医科大の研修医、グエン・ミン・ドゥックさん(三五)は、第一号だ。

「ベトナムでは言語障害の診断はできても、治療や訓練はほぼされていないのが現状」とドゥックさん。来日後はテキストを使った学習のほか、診察の見学や補助にも取り組んでおり、「学ぶことが多く驚いているが、祖国で必要な新分野を学ぶことができてうれしい」と話す。四年ほどで博士号の取得を目指し、帰国後は新設の養成課程で中核を担う予定という。

口唇口蓋裂の手術をした患者の発音を診察するベトナム人研修医のグエン・ミン・ドゥックさん(右)＝名古屋市千種区の愛知学院大歯学部付属病院で

（c）.中日新聞社　無断転載、複製、頒布は著作権法により禁止されています